日本語漢字教育におけるレアリアの活用方法に関する考察

岩崎　透

１．　はじめに

筆者は筑波大学日本語教育学学位プログラムの日本語教育実践研究１で「総合漢字６クラス」の教壇実習を行った。そして実習の開始にさきがけて、600 字～800 字を習得済みの学習者を想定し、当該クラスで使用していたテキスト『Intermediate Kanji Book vol.1』の６課～10 課に対応した「ボーナス問題」を作成した。「ボーナス問題」とは、宿題として必須ではないが、積極的な解答があれば宿題中の減点を補填するための加点をするために設定された問題である。課題に対して学習者に積極的に取り組んでほしいという観点から、視覚的な情報が豊富なレアリア[1]を活用した。本稿ではこのレアリアの課題作成から実習でのフィードバックを通じて、得られた視座と反省点そして今後の課題について分析していく。

２．　漢字指導教育におけるレアリア活用に関する先行研究

川口義一(1993)は外国人に対する日本語教育において言語の機能と文脈との関係認識や異文化理解を深めるため、教材はできるだけ「生のもの(authentic materials)」を活用することを推奨している。そして川口(1995)においては、漢字教育においても学習対象の漢字を含む語句をオーセンティックな（実際に使用されている言語材料に単純化のための加工を加えない）資料で提示し、使用文脈とともに提示することで、①漢字語彙の意味把握、②幾つかの語彙に共通して見られる単漢字の意味を抽出するという、漢字学習の基本的課題に対して高い効果が見込まれるのではないのかという視座から実践的報告を行っている。

川口の報告は長期間実施されたものではないが、レアリアの活用は学習者の習得のみならず、漢字語彙と意味などの認識について考えさせられることが多々あり、教師の自己研鑽という視点からも積極的活用を推奨している。

３．　レアリアを活用したボーナス問題作成の活動

川口(1995)はオーセンティックな教材として「求人広告紙」「白無垢の紹介文」「お守りの紹介文」「地図」「懸賞応募ハガキ」などの資料を提示しているが、筆者も川口の提示した資料例を参照しつつ、可能な限り文字情報が少なく、なおかつ学習した漢字が強調して使用されている画像という観点で「Google 画像検索」にてレアリア用の画像を検索した。そして『Intermediate Kanji Book』の指導項目との整合性について指導教員の指導を仰ぎつつ、内容・構成等を変更しながら下表のボーナス問題を作成し、『中

---

[1] レアリアとは「実物もしくは模型・複写などの実物に近い形の教材を指す。言葉では描写しにくい物を説明するときや、練習の課題の遂行に臨場感を出したいときなどにはよくレアリアが使われる」（川口他(1995)p. XIV より）本稿におけるレアリアとは、主にインターネット上で収集した画像を指している。

級漢字語彙用法問題集２』の宿題における既存のボーナス問題と差し替えて配布した。

表１　作成したボーナス問題の一覧

課及びトピック	作成したレアリアの内容とそのねらい
Lesson6 （漢語の語構成）	・地図や見取り図の接尾辞に使われている漢字を探す（レアリアを使用） ・接尾辞を活用して学習者のよく知っている建物の見取り図を書く ［ねらい］ 接尾辞の漢字が実生活の中でどのような形で活用されているかを、レアリアで学習者に提示し、受容及び産出の能力を高める。
Lesson7 （漢語の動詞）	・ポスターに使われている副詞的に使われる漢字を探す（レアリアを使用） ・書き換え問題及び自作のポスター作成 ［ねらい］ 副詞的に使われる漢字が実生活の中でどのように活用されているかを、レアリアで学習者に提示し、受容及び産出の能力を高める。
Lesson8 （漢字の音訓）	・雑誌の表紙などの様々なメディアに使われている複数の読みがある漢字（レアリアを使用） ・複数の読みを絵とともに書く ［ねらい］ 複数の読みがある漢字が実生活の中でどのように使い分けされているのかを、レアリアを通じて学習者に提示し、受容及び産出の能力を高める。
Lesson9 （同訓の漢字）	・同訓の漢字の間違い探し ・漢字クロスワード ［ねらい］ 実際に PC で誤変換されるケースを基に間違い探し文を作成し、同訓漢字の識別能力を高める。クロスワードはゲームとして楽しんでもらいながら、減点分を補填してもらうことを目的として作成。
Lessson10 （類義語の漢字）	・画像を活用した同義語の使い方（レアリアを使用） ・画像を活用した類義語の使い方（レアリアを使用） ［ねらい］ 広告や雑誌で実際に使われた画像を基に、同義語及び類義語を使い分ける能力を高める。

４．　実習における授業の進め方

総合漢字６の授業では最初の授業で集まった学生に対して、初回にオリエンテーションとレベルチェックテストを実施し、指導教員がその結果をもとに適正レベルか否かを学習者にアドバイスした。最終的には学習者自身によって総合漢字６を登録するかどうかを決めてもらい、残った学習者に対して授業

が開始された。

基本的な流れは以下①～③を課毎に実施するというもので、筆者は③の「宿題のフィードバック」部分（45 分間）で３回の教壇実習を行った。実習の授業に際しては②の段階で回収した学習者の宿題の内容をチェックし、誤りが見受けられた場合は教案に指導項目として反映させるという形でフィードバックを行った。

表２　実施手順

①　『International kanji book』６課～10 課をもとに導入、基本練習、宿題配布。
②　授業開始時に宿題を回収。授業では応用練習を実施し、授業最後に配布プリントを基にペア・リーディングを実施。
③　クイズ（リスニング及び筆記の確認テスト）実施後、宿題のフィードバック。

表３　作成した教案の一部

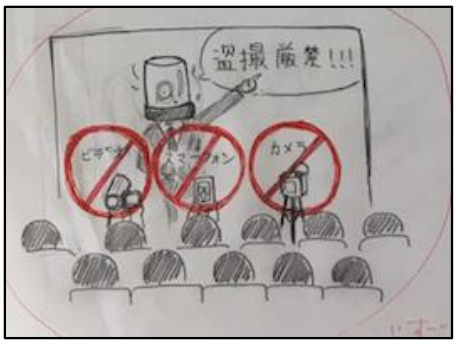
総合漢字 6B（８課）				
８課の宿題は非常に間違いが少なかったので、ボーナス問題をじっくり行う				
漢語の語構成				
項目	学習者とポイント		内容	時間
【1】 5	中国 A 台湾 A	精進 不精	「しょうじん」の読みと意味を再度確認 「ぶしょう」を「ふせい」と読み間違い	PPT
6	ベトナム A	女神	「じょしん」と読む（間違いではないが、普通は「めがみ」）「女神」の例を幾つか	PPT
7	中国 C	歳暮	「さいぼ」と読み間違い「せい」とよぶのはこれだけ 年末の冬に贈る贈り物であることを説明	PPT
9	中国 B	引率	「いんそつ」を「いんりつ」と読み間違い	PPT

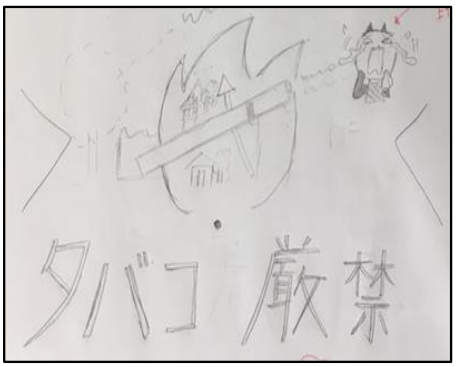
５．　ボーナス問題の実施結果と問題点について

５．１　画像とともに漢字を産出する問題の結果と課題

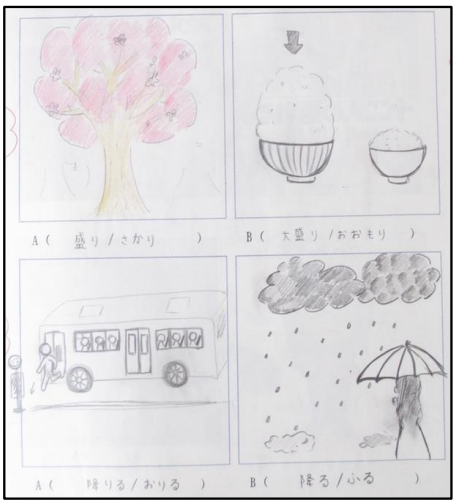
右上段の画像は『Intermediate Kanji Book』Lesson7 の課題である「副詞的に使われる漢字」を活用して「ポスターを書こう」というボーナス問題の例として学習者に提示した画像である。非常にシンプルな画像ではあるが、時計が人の顔のように描かれており、険しい表情をしていることから「時間を必ず守りなさい」という強い命令的な意味があること、副詞的に使われる漢字「厳」を活用することで文字数が少なくなった結果文字を大きくすることができて、訴求効果を高めることなどを見て取ることができるだろう。

この課題に対しては学習者から右中段の画像のような解答が得られた。右下段の画像の「盗撮厳禁」のポスターは、実際に映画館で映画開始前に流される盗撮抑止用映像のオマージュであり、実際の生活におけるイメージからこの回答を導き出していることがわかる。吹き出しを活用することで、必要最小限の文字で見ている者に意図を伝えられるようになっており、素晴らしい仕上がりになっていると言えるだろう。右画像の「タバコ厳禁」のポスターも非常にユニークな力作ではあるが、どういった場面で使われているのかが少しわかりにくい。しかし、副詞的に使われる漢字の意味を理解し、少ない文字を大きく書き上げることで訴求力を高めている点などから、非常に実用的な仕上がりになっていると感じられる。





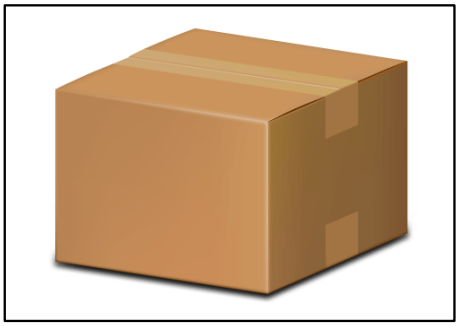
しかしながら、こういった解答は絵を書くことが好きで、元々習得レベルの高い学習者のみから積極的に寄せられたもので、評価の基本となる宿題をこなすことで手一杯で、絵がさほど好きではない学習者からは積極的な解答が得られなかった点が問題であった。



また、宿題に絵を書かせることの妥当性という意味でも疑問が残ってしまったサービス問題もあった。右画像はLesson8 で学習した「２つ以上の訓読みを持つ漢字」のイメージを書く、もしくは画像を貼り付けて、２つ以上の訓読みを持つ漢字を書くという問題である。

クラスの半数程の学生が非常に熱心に書いてくれたが、ここで画像を使う意味があったかどうか、再考の必要があるだろう。また「ポスターを書く」という行為と比較して、日常的にこのような絵を書く機会はまずないため、妥当性に欠けていたという感は否めない。そして、やはり絵が苦手な学習者にとっては取り組みにくい課題で、失点を挽回する機会から遠ざけてしまったのではないのかと感じられた点も問題であった。

漢字の産出を目的としたアリアの課題は「いつ」「だれが」「どこで」「なにを」目的としているのかを問題文の中で明確にし、学習者に対して「なぜ学習した漢字を書かなければならいのか」を暗示することが必要であり、今回作成した問題にはその点が不十分であったと考えられる。そういった点を加味した問題例として、右画像のような何も書かれていないダンボールの画像を提示し、「３月９日にお客様に必ず届けなければならない荷物が入っています。間違って荷物が遅く着かないように、副詞的な漢字を使って注意書きをしてください」という問題にすれば、「３月９日必着」という回答を期待することもできただろう。こうすることで学習者にとっては絵を書く必要性がなくなり、回答における負担が軽減し、より日常的に行われる行為に近づくため、真正性の向上も見込まれる。そして何より産出された漢字が、正しく機能しうるかという視点から、より明確に正誤を評価できるようになると言えるだろう。



５．２　画像から指定された漢字を認識する問題の結果と課題

画像から指定された用法の漢字を認識し、それを書き出すという形式の問題も何点か用意した。右画像は茨城県水戸市にある茨城県近代美術館へのアクセスを表示した地図の画像である。「この画像から接尾辞に使われている漢字を抜き出す」という問題を課した結果、課題に取り組んだ学習者は常磐（線）、駐車（場）、消防（署）、・・・というように、出題者の意図を汲み取った解答ができていた。この画像は豊富に接尾字を含む語彙が使用されており、日常でも地図を読むという行為は頻繁に行われるため、有効

な問題であったと考えている。

しかし、右上段の画像を用いた「給食試食会のご案内」から副詞的に使われている漢字を探し出して意味を書いてください、というサービス問題では、「試食（試しに食べる）」を例に出してしまうと「先着（先につく）」しか副詞的に使用されている漢字がないという問題が発生してしまった。

可能な限りオーセンティックな問題を作るため、情報が豊富に詰め込まれた画像を選んだのだが、結果としては簡単な問題を一つしか作ることができなかった。上述した地図から接尾辞を認識するという問題と比較して明らかに非効率的であったと言えるだろう。

一方、Lesson8「複数の読みがある漢字」では画像を加工して、必要な情報のみが記載された問題を作成した。右下段の画像は「盛る」に複数の読みがあり、それが「もる」か「さかる」なのかを問う問題であったが、正答率は半々で、「試食会のご案内」と比べて文字数は少なかったが、学習者にとって難易度の高い問題であったと言えるだろう。

このように画像から漢字を認識し、情報を読み取るという問題では、意図した漢字が豊富に含まれている画像に巡りあえればいいが、そうでない場合には加工を施すなどして、文脈が理解できる必要最小限度の情報量に抑え、問題を作成することが望ましいという視座を得ることができた。漢字を使用したメディアから様々な情報を受容するという行為は産出よりも頻繁に行われる行為であるため、この問題を通じて「漢字学習によってこれまでよりも情報をより多く、より正確に取得できるようになった」という達成感に寄与することができると期待される。しかしながら上述したように、学習者に注目して欲しいポイントのみがフォーカスされて用いられているケースは稀であるため、日本語教師が漢字に関する知識を基に、手を加え、その成果を一つのリポジトリーとして貯蔵してくことが必要なのではないのかと考えている。

５．３　授業で観察された学習者の誤用

筆者は教壇実習で Lesson6～Lessn8 の宿題のフィードバックを担当した。すでに 600～800 字程度を習得済みの学生が対象ということもあり、導入時には概ね理解をしていたように感じられたが、宿題のチェックをすると、全課に共通して「読み」の間違いがあることが確認された。詳細を下表にて示す。

表４．読みにおける誤用のパターン

分類	国籍	誤用例
促音便	台湾	各国（かくこく）
促音便	ロシア	熟考（じゅくこう）
促音便過多	台湾	素質（そっしつ）
長音の脱落	中国	報告（ほこく）
濁音型音便	中国	本国（ほんこく）
濁音型音便	中国、ロシア	共存（きょうそん）
濁音型音便過剰	中国	団長（だんじょう）
撥音脱落	中国	信頼（しらい）
音が長くなる	中国	愛護（あいごう）
音が長くなる	アゼルバイジャン	弁護士（べんごうし）
長音脱落	アゼルバイジャン	優秀（ゆうしゅ）
音訓整合性	中国	大群（おおぐん）
難読読み間違い	中国	不精（ふせい）
難読読み間違い	ロシア	女神（じょしん）
難読読み間違い	中国	歳暮（さいぼ）
難読読み間違い	ロシア	雑用（ぞうよう）
難読読み間違い	中国	優れる（やぐれる）

中国語母語話者は、破裂音の有声無声の区別が曖昧な学習者が多い[2]ことが影響しているのか、「本国」を「ほんこく」と読み間違えたり、逆に濁音便のルールを過剰に適用して「団長（だんちょう）」を「だんじょう」というように間違えたりしてしまった学習者がいた。

こういった間違いの傾向から、中国語母語話者は文字一つ一つの読みをそのまま結合させて読む、あるいはそこに規則性を当てはめていることが伺えるだろう。つまり言葉の音韻情報と漢字のイメージを結合させているのではなく、あくまで漢字一つ一つの持つ音の規則性を当てはめるという解答のプロセスを経ているということである。同様の認知プロセスはロシア語母語話者にも見受けられたことから、漢字圏・非漢字圏といった母語の影響によらない傾向であるのかもしれない。

一方、アゼルバイジャンの学生の解答では長音の長短の誤りが見受けられたことから、学習者によっては音韻情報と漢字語彙を直接的に結びつけて回答を導き出しているケースもあることがわかる。読み間違いは全部で１８あり、そのうち音韻情報との結びつきが曖昧で、漢字の規則性に頼った結果間違えてしまったと考えられるケースは１１あった。読み間違い全体の 60%強を占めており、改善する意義がある問題といえるだろう。

現在では、読みの曖昧さは産出時に非常に大きい時間的なロスを起こす原因となることが予見される。

---

2 松崎(2015)は、中国語母語話者は破裂音の有声無声の混同が起こりやすく、「しらべて」が「しらぺて」と誤って発音する傾向があるとしている。(p. 193)

上記の間違いで言えば「だんじょう」という間違った読みの知識からPCの変換で「団長」が導かれることはないため、もし団長という言葉をPC上で再現しようとすれば「団」と「長」を別々に変換して作成しなければ目標とする漢字に辿り着けないということになる。２つを分けてそれぞれを変換で再生できる場合はなんとかなるが、仮に「絨毯」を「じゅうだん」と間違えて覚えた学習者は「絨」と「毯」をそれぞれ別々に再生せざるを得なくなり、母語話者でも非常に難しい変換作業となってしまう。こういった作業効率上のロスは非母語話者にとって大きなストレスとなり、様々な文章産出活動に悪影響を与える可能性がある。日本語の文書作成をPCの変換に頼ることが多い時代において、漢字の読みと音韻情報の結びつきを強めることは喫緊の課題であると言えるだろう。

５．４　今回のボーナス問題にかけていた視点

第６章で取り上げた漢字の読みと音韻情報との結びつきという視点で自身の作成したボーナス問題を振り返ると、更に改善の余地があったことがわかる。加納(1994)にあるように、漢字は表音文字にはない「意味」「用法」といった学習項目があり、徐々にこの２つの要素に学習の比重が傾いてくるものの、上述の誤用を鑑みれば「音」もまた学習項目として重要な要素であり、ボーナス問題作成において考慮すべき点であったと言えるだろう。

では、音韻的な情報を含む漢字のレアリアとは何なのか。一つのアイデアとして、音声の情報を個別に作成して添加するということを提言したい。「地図」のサービス問題の例で言えば「美術館へ行くまでの道のりを聞く会話」を聞かせて、正しい道を接尾辞の漢字を活用しつつ書き出すという問題も考えられるだろうし、「先着」のサービス問題の例でいえば、「こちらの商品、先着５０名様までとなっております」といった音声を流して「先着」という漢字とその読みを書くというディクテーション問題も考えられるだろう。レアリアは視覚的に捉えられるものであるという既成概念にとらわれずに、「音声レアリア」も漢字指導に積極的に取り入れることが、学習者の更なる習得効率の向上に寄与するのではないかと感じた。

６．　おわりに

本稿においては、オーセンティックな教材という視点から、インターネットを活用して収集した様々な画像を基にレアリアのサービス問題を作成し、宿題として出した結果どのように学習者がそれに取り組んだか、その結果はどのようなものであったかを考察した。

学習者に産出活動を行わせる場面では、日常でその課題が行われるかどうかという視点が、作成した問題の妥当性につながるのではないかという視座を得ることができ、レアリアから漢字を認知し、情報を読み取るための問題を作る際には、情報量の多さや真正性（手を加えずそのままに使うこと）にこだわるよりは、学習者に注目してほしい部分にフォーカスを当てた方がより高い効果が得られるのではないのかという視座が得られた。

また、学習者の宿題のチェックで音韻情報と漢字語彙の結びつきの曖昧さが原因と思われる間違いが見受けられたことから、「音声レアリア」の活用も積極的に行うことが重要なのではないのかという示唆を得ることができた。

さらに、こういった教材を作成する活動そのものが川口(1995)の指摘するように教師の自己研鑽とい

う視点からも大きい意義があると言えるだろう。今回使用した画像は「Google 画像検索」で探したものだが、大規模な検索システムを活用したとしても容易に意図した画像が見つけられるとは限らず、学習者に指導した言葉が「いつ、どんな時にこの漢字を使うのか」、加えて「なぜこの漢字を使うのか」ということを考えながら検索しなければ、教材に適した画像を見つけることは困難な作業ではあるが、検索の過程で試行錯誤を重ねることで、教材の漢字がどのような状況で使われるのかを考える機会が与えられ、最終的に教師の指導スキルが発展することが期待されうる。そしてこうしたプロセスを経て作成された問題は資料として蓄積され、発展させていけるという点でも効果的であると思われる。しかし、素材集めに時間がかかることや、課で指導したい内容の画像が必ず見つかるわけではないし、レアリアに偏りすぎるとワンパターン化するなどのデメリットもあるため、時折副教材的な位置づけで使用することが望ましいと言えるだろう。

この教壇実習で得た知識を更に発展させ、今後様々な場面で活用したいと考えている。ボーナス問題の作成から授業の進行に至るまで、多くの時間を割いてご指導いただいた加納先生と熱心に学習に取り組んでくれた総合漢字６の学生達にこの場を借りて改めて感謝の意を表したい。

参考文献

加納千恵子(1994)「漢字教育のためのシラバス案」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』9 号,41-50.

川口義一(1993)「岡崎敏雄・川口義一・才田いずみ・畠弘巳共編著『ケーススタディ日本語教育』『国語学研究と資料の会』17 号, 55-57.

川口義一・加納千恵子・酒井順子(1995)『日本語教師のための漢字指導アイデアブック』創拓社

松崎寛・河野俊之(2015)『日本語教育能力検定試験に合格するための音声 23』株式会社アルク

教科書

加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智(2008)『INTERMEDIATE KANJI BOOK VOL.1』凡人社

参考 URL

Google「Google 画像検索」(2017 年 10 月 3 日最終アクセス)